

風のなかのあなたに

大原富枝



中公文庫

中公文庫 ©1981

風のなかのあなたに

昭和五十六年五月二十五日印刷
昭和五十六年六月十日発行

著者 大原富枝

発行者 高梨 茂

整版印刷 三晃印刷
カバー トレープロ

用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三三四

定価 三三〇円

中公文庫

風のなかのあなたに

大原 富枝著



中央公論社

目次

一の章 愛と憎しみ——沈黙の三十年

高原の家

9

芒の屏風

15

リパの落葉

25

戦死の知らせ

35

除籍の跡

41

二の章 知る事実——苛酷なことでも

縁の人々

49

海辺の墓、幻の墓

62

炎上した言葉

告白の手紙

84 74

三の章 故郷——そのひと

遠いやまなみ

焼き捨てられた青春

優雅な囚人

117 105 97

四の章 生あるうちに——風のなかのあなた

廃墟

吉野の里

老いた母上

150 144 135

五の章 君は還らず——戦死への道

別離の日々

バタアン戦記

カラギナン河畔の死

地藏ヶ原の初秋

あとがき

文庫のためのあとがき

バタアン半島略図

160

217 215 203 192 171 161

一の章 愛と憎しみ——沈黙の三十年

高原の家

高原は秋が深くなろうとしています。まわりの山荘のほとんどはもう閉められて、ひっそりとしたなかに、啄木鳥の樹々の幹をたたく音だけが聞えます。

この浅間の山麓に、毎年一番最後まで残るのが私です。夏毎に一番早く開くのも私の山の家です。

この火の山の山麓の家にいるとき、あなたはいつも私の傍にいます。死者であるあなたはいつも黙って、私を眺めています。

海拔一、〇〇〇メートルあまりの高原であることは、四国山脈の奥の深い山麓である、私の故郷の村とどこか似通っています。

禁猟区であるこの山麓のように、雉や栗鼠が毎日庭に来たり、兎や狐をついそこらで見かけたり、ということはありませんでしたけれど、私の故郷の山にも兎や雉や山鳥が棲み、晩秋になる

と、山の上の甘藷畑に猪が出没する話も出たりする、そんな山里でした。

末は四国三郎といわれる吉野川が、清らかな小川といってもいいほどの上流にある、名前も吉野村といった私の村は、あなたが七年間通いつづけたところですよ。

煩わしい雑用が次々とおしよせる東京を離れてこの山の家をやってくるとき、私は過ぎ去った若い日々の還ってくるのを発見します。二十歳の日々がひっそりと甦ってくるのです。あなたが無言で、私の傍に寄り添って立つのを感じます。

死者であるあなたは何も申しません。しかし、私たちはどんなにたくさんのかことを、ここで話し合ったことでしょう。

今日は朝から雉がかん高い声でしきりに鳴いています。ふと仕事の手をとめて眼をあげると、茂るままに茂らせてある庭の野草のなかに、一点真赤なものが眼を惹きました。雉が、雄の雉が、赤い頬を草の間から覗かせているのです。

私は知らないふりして、注意深く眺めています。胸の濃い緑の羽毛のふくよかさや、黄褐色の背中の文様も見えます。

（ほら、雉の雄よ、きれいでしょ！）

私はあなたにささやきます。雌の雉なら毎日のように、もう大分大きく育った七、八羽の雛をつれて庭で遊んでいます。雄の雉がこんなに長くこの庭で遊んでいるのは珍しいのです。

いつだったか、あれはもう晩秋の、落葉松茸とも呼ぶ小さい霜降茸が出るころ、頭上いっぱい大きな翼を拡げ、長い尾翼で身体の平衡をとりながら、濃緑の胸毛を輝かせて飛んでいった豪華な姿を思い出しました。開拓村へ通じる、見渡す限り一望茫の原で、そのなかから急に大きな羽搏きの音をさせて翔び立ち、びっくりさせられたものでした。あなたもあのとき、私の傍で黙ってそれを仰いでいました。あの開拓村へ通じる芒の原野は、死者であるあなたが傍にいることを、どこにも増して強く私に感じさせる場所でした。萩と芒だけの広々とつづく原野で、死者であるあなたの魂の好むであろうと思われるところでもありました。

開拓村の人々は大部分が敬虔なカトリックだそうで、村の聚落の一番高い場所、水源地に隣り合ったところに、小さく可愛らしい教会があります。白い教会の屋根のてっぺんには、白い小さい十字架が立っています。

夕陽が剣ヶ峰けんがほうと呼ばれる大いなる浅間の稜線の後に落ちて、壮大に燃える夕空に尾根が黒々とくっきり描き出されるとき、開拓村の小さい教会の白い十字架と、火の見櫓の梯子と、その頂上に吊るされた半鐘の影が、真赤に燃える空に黒い影絵になって浮び上ります。

それは人の心の奥に納われている故郷の村とか、祖母とか、村祭りの笛、太鼓などという、郷愁を誘う概念を絵にしたとでも呼ぶほかはないものです。数秒の間に移り変ってゆく壮大な夕焼の光景は、見たこともないものであったとしても、誰でも、幼いとき、いつかどこかで見たこと

のあるものだ、としか思ひようのないものでした。

白い十字架のある小さい山の教会などが、私の童女の日の風景にあるはずはありません。それでもこれはもう、「童女の日」とか「郷愁」とかいふ、普遍性のある概念そのものでした。

敗戦直前、ソヴィエトの突如とした参戦で、ソ満国境の開拓村に入植していた人々は、筆にも口にもつくしようなない地獄の苦難を嘗めながら、次々と死んでいって、半数を失い、ほんとうに生命からがら引揚げて来たのでした。この火の山の麓の不毛の火山灰地に落着き、ここを開拓した人々の苦難の歴史を私はおおそは知っています。

冬は地下数十センチも凍ってしまうこの土地は豆類だけは何とか実るものの、他の作物はなかなか実らず、収穫らしいものをあげるまでには、言語に絶する長い苦勞がつづいたことも、私は折にふれ聞いているのです。

十数年の勞苦がようやく報われようとして、家々には乳牛か豚か牛が飼われるようになり、山羊や犬も子供たちと戯れ合ったりする風景がやがて見られるようになりました。寒さを防ぐために軒を低く窓を小さく造られている家々は、聚落全体が手を取り合ってじいっとしゃがんで、まるで苛酷な苦痛の通り過ぎるのを堪えているように見えたことも、私は憶えています。

年毎に豊かになっていって、村の家々は棟を高くあげ赤い屋根の住居に改築され、各戸がトラクターやライトバンを備え、共有の自家製粉所を持つようになったいまも、白い十字架の教会と、

火の見櫓の梯子と吊鐘が、燃え立つ夕焼の空に黒くくつきりと影絵になって浮び出る、このやさしい童画のような風景は変わりません。

空を覆うように何千羽という渡り鳥の渡ってゆく光景も、一面の葦の茂る沢に、よしきりが鋭く鳴き交しながら降りてゆく初秋の眺めも、ここにはまだあります。

夏の朝まだきに、濃く立ちこめた靄を透して狐の子供たちが三匹、犬っころのように上になり下になり、柔かく互いの肢を噛み合ったりして戯れあっているのを見たこともあります。夕焼が血のように燃える時刻に限って、鋭くかん高く二声だけつづけて鳴く狐の声を何度となく聞いたこともあります。

沢の湿原に榛の木が独特の形のやさしい姿をして茂り、その木の葉だけを選んで卵を産む「みどりしじみ」という小さい蝶も、ここにはまだ絶滅を免れているのです。

だからこそ、ここでは私もあなたとともに棲み、ともに語りあうことが出来るのでしょう。ここには、私たちの青春に存在した自然が、緑色の空気が、そのままあります。バタアン半島のカラギナン河のほとりで戦死した三十一歳のあなたの魂も、ここでならまだ息づいていられるのでしょう。

大学生時代に、あなたが兄上と二人で自炊生活をしていた、豊島区長崎南町も、K薬局の息子の家庭教師になって、一時は住込んでいたこともある、芝白金三光町、そこからさらに引越した

下宿で、長唄師匠の女主人の二階であつた麻布笄町などという、懐しい町の名前さえいまはもうなくなつてしまいました。あなたの愛した東京も、変り果てました。

四国山脈の山麓の奥の私の故郷さえ、ダムが造られて、あなたがこよなく愛した私の家のすぐ下を流れるあの小川の水も瘠せ、昔の面影はなくなつてしまいました。この浅間の山麓だけが、あなたの魂とともに棲み、話し合うことの出来る場所として、私に残されているところです。

ある年の夏、私が、近くの沢へ下りる坂道を犬をつれて下りてゆくと、二人の青年が下から登つて来たことがありました。思わず私は足を止めて坂道の途中に立竦み、眼を凝らしていました。その一人が、学生時代のあなたに、どことはいえないけれど、一眼見たときの骨格がとてもよく似ていたのです。

青年たちとすれちがうとき、私は眼を遠くにやっていました。頬が燃えるように熱くなつていたのでした。このような錯覚にも、この浅間の麓以外のどこの土地でめぐり逢うことが出来るでしょう。この思いがけない経験のために、私は四、五日も心が温かく、仕合せな心地でいることができたのです。

芒の屏風

小梨の花が咲きはじめたという便りをもらったので、二、三日の予定で千ヶ滝の家に来ました。小梨という、初々しい花をつける美しい花木を知ったのも、一年のうちの何か月かをこの浅間の麓に過すようになってからです。あなたも生きている日には、ついにご存知なかった花でした。そのこと一つを思っても、あなたを哀れに思うのです。それほど若死したあなたはこの世の美しいものの、優しいものの、貴重なものを知ることなしに短い生涯を終えてしまいました。

信州という土地には、小梨の木は無数にあります。私たちの故郷である土佐にはなかったように思います。やはり寒い土地の樹木なのでしょう。

私の庭には小梨の大木が一本あります。山桜より少し遅れて、あるいは遅れ咲きの山桜と重なり合いながら、小梨は枝いっぱいにおびただしく小さい花を開きます。

桜や海棠に似てそれよりもずっと小さい、短い柄を持つ愛らしい花で、蕾は赤っぽく薔薇色を